

音楽を核とするサポート校の実践

—— C & S 音楽学院（福岡市） ——

大久保正廣

（人文学部 教育・臨床心理学科）

はじめに

我が国の高校進学率が90%を超えてから既に40年に近づこうとしつつある今日、高校における不本意入学者や中退者の問題、キャリア教育の推進は長い間の課題となっている。文部科学省による「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」によれば、平成22年度の「高等学校における中途退学等の状況」55,415人（在籍者数の1.8%）は、この30年間大きな変化は無く2%前後となっているが、「小中学校の不登校の状況」は、小学校22,463人（在籍者数の0.32%）中学校97,428人（同2.73%）で20年前の約2倍となっている。

こうした教育的課題に対応するために、後期中等教育においては、単位制や通信制、総合学科等の選択肢を広くする多様化の方向で改革がなされてきた。しかし、特に小中学校で不登校になった児童生徒は高校進学が大きな壁となり、希望する高校へは学力不足等で進学できず、仮に合格したとしても中途退学する場合が少なくない。こうした状況のもとに生まれてきたのが、主として通信制高校の生徒をサポートする民間の教育機関であるいわゆるサポート校である。CはCreative、SはSocializeを意味する、C & S音楽学院（福岡市）もそうした時代の要請を背景として、通信制のクラーク記念国際高等学校と提携し高等学校卒業資格を目指すサポート校として2001年4月に誕生した。既に開校13年目を迎える本学院は、2011年3月に学校教育法第55条によって福岡県教育委員会指定の「技能教育施設」となり、中等教育におけるキャリア教育推進や不本意入学者・中退者の問題といった今日的な課題に向き合う上で、少なからぬ示唆を与えるものとなっている。

本稿では、高校教育におけるサポート校の現状と課題、キャリア教育推進の現状と課題を大まかに捉えた上で、こうした中でC & S音楽学院の持つ教育実践の独自性と意義について具体的実践をもとに紹介していきたい。

なお、本稿の中心資料は、『音楽がボクらの学校だ—輝きを取り戻した生徒たち—』（私家版、2004年）であるが、そのほか学院長へのインタビューと2回の参与観察をもとにしている¹⁾。本資料が、さらに多様な分野におけるこれからの中等教育実践の一助ともなれば幸いである。

サポート校の現状と課題

通信制高校はもともと高校教育を受けたいと切望しながらもかなうことのできなかった社会人や地理的要因によって通学不可能な生徒のために誕生した。しかし、1980年代後半から不登校や高校中退が問題になると、そうした生徒のための学校としても選択肢が広がってきた。

通信制高校の主な特徴は、入学時は書類審査が中心であり、学力検査がない場合が多いということ。多くが単位制であり留年が無く、転入と編入も比較的スムーズであるということ。単位取得の条件はスクーリング、レポート、テストの3つであることである。しかしこれらは、少なからぬ不登校生や高校中退者にとっては低いハードルというわけではない。そこでサポート校では、通信制高校と提携し、レポートやテストの対策授業を行って、生徒の卒業を支援している。また多くのサポート校では、不登校生への手厚い環境作りや、受験指導、音楽や芸術のコースを設置するなどの工夫をして卒業をサポートしている。

1990年代初期に誕生したサポート校についての本格的な研究は少ない。東村は、詳細なフィールドワークによってあるサポート校を調査しているが、その教育実践の意義について①組織としての構造と機能 ②教師と生徒の関係 ③生徒に及ぼす教育的効果 といった観点から考察している²⁾。

まず①組織としての構造と機能という面から見れば、

¹⁾ なお2004年の資料には実名が用いられている場合もあるが、既に出版当初において相互に了承済みであり、本稿もそれに倣っている。

通信制高校との連携関係があるため、「明確な役割分担」があるという。それは、評価をする通信制の役割と、評価をする必要のないサポート校の役割である。サポート校はそのため「生徒の味方に徹することができる」のである。このことは、授業においても見られ、「通信制を卒業するために必要な学習とふだんの授業との切り離し」を可能としている。したがって、ふだんの授業では「生徒に合わせた柔軟なもの」ができるのである。こうしたことが出来るのは、少人数であるためである。

次に②教師と生徒の関係は、「ひとりひとりへの対応」が重視されている。不登校であったり、他の生徒と一緒にいけない生徒など「様々な問題を抱えた生徒」であっても個別に対応し卒業資格が取れるのである。もっとも、「生徒を甘やかしてしまっているのではないか」と悩んでいることもある。また、教師達は「教師らしくないふるまい」を「意識して努めている」。教師としてではなく「対等な立場で接し」、ある教師は「生徒の一員、あるいは生徒のリーダーになるよう努力している」という。また、「生徒への配慮」についても「常に細かく気を配っている」。それは、少人数ゆえに可能でもある。

最後の③生徒に及ぼす教育的効果だが、それは、「はみ出して（あるいは、はじきだされて）しまった子どもたち」にとっては、「安心できる居場所を見いだせること」「ドロップアウトした生徒にもやり直すチャンスが与えられること」それが「最大の意義」だという。

課題については、東村は「二つの矛盾」を指摘している。まず、「実践の持つ意義が、問題点でもありうる」とし、学力面や生活指導的な面での問題点であり、次に、「教育制度面での矛盾」として、「制度化された教育」に問題がある場合の「補充物」として存在しているため、「学校のアンチテーゼとはなりえない」という点を指摘している。

こうした様々な問題を抱えているが、一方その積極的な面にさらに光を当てれば、サポート校は今後これまで以上に多様な可能性を秘めていると思われる。以下、音楽におけるサポート校教育実践の代表的な事例のひとつとして本学院を紹介したい。

本学院のこれまでと現在の教育課程

本学院は2001年4月に音楽系サポート校として開校し、今年2013年3月までに既に10期生までを送り出している。その間2007年には現在の自社ビルに校舎を移転し、開校10周年の2010年には10周年記念アンバーサリーコンサートを開催し着実に発展を続けてきた。これまでの成果は2011年3月の福岡県教育委員会による技能教育施設としての認可としても現れた。

音楽におけるキャリア教育の具体的な実践事例につい

ては、以下資料の中から詳細に示したいが、音楽における輝かしい実績も本学院にはある。2006年7月には卒業生の手寫葵が、スタジオ・ジブリ新作映画「ゲド戦記」の主題歌でメジャー・デビューしているし、2012年8月には、卒業生のN.O.B.U!!!!がユニバーサルミュージックジャパンから同じくデビューしている。また、ヤマハ主催の全国最大規模のコンテスト、「Music Revolution」では開校から11年の間に5回、本校の生徒が九州代表として全国大会に出場している。さらに2012年に開催されたビクター主催の「ガールズ・ヴォーカルオーディション」では、全国で4次審査まで残ったわずか6名の内、本学院生が2名を占めた。

こうした実践は世の注目も集め、本稿の資料でもある第1期生の卒業までの実践記録である『音楽がボクらの学校だ ―輝きを取り戻した生徒たち―』（2004年）は、2004年に第23回新風舎出版賞・ノンフィクション部門優秀賞を獲得、さらに2007年には、本学院を描いた漫画「ダイヤモンド」が竹書房発行の雑誌に掲載された。

現在のカリキュラムは、高校卒業資格を目指す「高校コース」と小学生から社会人までを広く受け入れ誰もが音楽を学ぶことのできる「音楽専攻コース」に分かれている。

「高校コース」は、専攻学科はヴォーカル学科、ギター&ベース学科、ドラム学科の3学科に分けられ、さらにヴォーカル学科はヴォーカル&ダンスクラス、ヴォーカル&ソングライティングクラス、ヴォーカル&声優クラスの3クラスがある。クラスの募集人員はそれぞれ10名前後であり、ギター&ベース学科、ドラム学科もそれぞれ10名前後となっている。また、「音楽専攻コース」では、午後や夜間に、高校コースと同様の音楽が学べるほか、電子音楽のDTMやバンドについても学ぶこともできる。

はじめに述べたように、本学院は、学校教育法第55条によって福岡県教育委員会指定を受ける「技能教育施設」であり、通信制のクラーク記念国際高等学校と併学する高等学校卒業資格を取得することができる。したがって週五日のうち、午前中は高校の授業を2時間、午後には音楽の授業を2時間行っている。高校授業では、担当教師の指導のもと、各人の能力に合わせた年間スケジュールを組み、徹底した個別指導によって無理のない単位取得を目指している。また、音楽授業では週に一日は学科をこえて学ぶことのできる選択授業や、学科合同のアンサンブル授業、グループを組むバンド授業などを組み込んでトレーニングを充実させている。

これまでは、高校卒業を待って専門学校に入学するというのが音楽を本格的に学ぶコースだったが、こうしたシステムの導入によって中学校卒業後の音楽教育が可能

²⁾ 東村知子「サポート校における不登校生・高校中退者への支援―その意義と矛盾―」『実験社会心理学研究』43巻2号、2004年、140 - 154頁。

となった。また、高校中退や高校在学中の生徒でも入学は可能であり、既に取得した単位については継続できる。したがって、卒業後は、音楽関係への進路・進学はもちろん、それ以外の専門学校、大学への進学や、高卒資格が必要な資格試験の受験も可能となり、多方面の進路選択ができるようになる。

以下は、本稿の中心となる本学院の具体的実践の紹介であり、長くなるが中心資料からの引用が中心となる。

創始者の挑戦と挫折、音楽への思い

本学院の注目すべき実践の根底には、やはり創始者である本学法学部出身の毛利学院長の個性的な体験と強い思いが色濃く反映している。ここで学院創設までに至るその個性的な体験と思いを取り上げることは、教育における理念と実践の深いつながりを鑑みる点で興味深いものがある。

大学を卒業した毛利氏は外資系の保険会社に就職した。入社後の二つの目標は、営業成績日本一であり、月給100万円であった。この目標は入社3年目に達成したが、そこで「働く意味」を見失ってしまい、ある朝、信号を懸命にわたる松葉杖の人が一生懸命に渡り終えたその姿に感銘を受け、「あんな生き方がしたい」と思う。「誰もがそうしているからという理由だけで、何となく決定し、そのくせ、その環境に対して不満ばかり感じている」自分を省み、「何でもいい、これからは自分が一番やりたいことをやって生きていこう」と決めたのだ。やりたいことを「消去法」で書き出し、「最後に残ったのがミュージシャン」だった。井上陽水等を輩出した「昭和」というライブハウスのマネージャーは、「ここで25歳まで歌って、サラリーマンになっていった人は多いけど、25歳でサラリーマンを辞めて歌い始めるのは君が初めてだ」と言ったという。

5年間福岡で音楽活動をして上京した後、挑戦と挫折を繰り返し続ける。

5年間福岡で音楽活動の後上京したが、上京の少し前に結婚していたので、妻には随分苦労をかけていた。田舎の両親からも「もういいかげんにやめて帰って来い」と言われていた。そして、きっと私自身も歌をやめたほうが楽になれる、と分かっていたように思う。

ところが、真夜中に妻を起こさないように、そうと布団を出て、小さな明かりの下で、形になるかどうか分からない曲を書いている自分があるのだ。

頭では分かっている、曲を書こうとする衝動が心の奥から突き上げてくるのだ。《このやっかいなもの、いったい何なんだ》と、私は自問した。そして、そのとき私は自分なりに、こんな答えを出した。

世の中には足の早い人、絵の上手な人、頭のいい人、力の強い人、弁のたつ人、歌が上手な人、絵が上手な人、いろんな人が、いろんな『特性』を持っている。10人いたら10個の特性がある。私は「音楽に惹かれる」という特性を持って生まれて来たのだろう。

じゃあこの『特性』は、何のために備わっているのだろうか。こう考えを進めてみた。たとえば手先の器用な人は美容師になって、綺麗に髪を結ってお客さんに喜びを与える。その美容師が仕事を終えて自宅に帰れば、食卓には新鮮な食材が並んでおり、《美味しいものを皆に届けて喜んでほしい》と、頑張っている農家の人や、漁師の人がいる。そして、その家にはテレビがあり、スイッチを入れれば、イチローや松井選手が、中田や中村選手が、自分の一番得意なスポーツで、みんなに夢や希望を与えている。

洋服のデザインを考えてくれる人、家具を作ってくれる人……家の中を見回すと私の生活は多くの人の「得意」なものに支えられていた。

つまり、人はそれぞれの特性を生かして、周りの人に何かを与え、与えられている。そうして「社会」っていうものが出来上がっているんじゃないかと思えた。あたかも、ピッチャー向きの人、外野向きの人、1番バッター向きの人、4番バッター向きの人等々、いろんな個性が集まって、ひとつの野球チームが出来上がっているように。

そうであれば、私も社会を構成する大切な必要因子ということになる。一人ひとりに『役割』があり、その役割を果たすために『特性』が備わっていると考えたのだ。

なら、私は「音楽」というこの道を、自分らしく歩いていこう。なぜなら、《自分に与えられた役割を果たすことこそ、最高に充実した人生》じゃないかと、思った。

年齢が35を過ぎた時、私は音楽で生計をたてることをやめて福岡に戻ることを決断した。友人からは、「音楽は趣味にするんですね」と言われたが、「いや、生活のために他の仕事をすることになるけど、私はミュージシャンだよ」と、負け惜しみで無くそう言った。

『生涯、音楽と共に』、たとえそれが、どんな険しい道のりだったとしても。

福岡に戻った後、友人の子どもが「高校で勉強する意味が分からない」と不登校となっているという相談を受ける。しかし、自分の高校時代を思い出すと、特に何か疑問を持つこともなく大学入試のための勉強しかしていなかったことに気づく。「これはもしかしたらあの頃の

私よりも、この子のほうがしっかりと考えているんじゃないか」と自省するのである。この生徒は、その後ハンドボールをしたいと部活動が盛んな高校に編入し全国大会に出場、大学の特待生も断りハンドボールが盛んな大学を目指して勉強する。「高校で勉強する意味」を見出した事例に感銘したこの体験は、「学校の在り方」を考えるうえで「大きな示唆を与えてくれることになる」。挑戦と挫折を繰り返した自らの青年期の体験は、いつしか教育への思いとつながってくる。「もし、人生に失敗があるなら、それは敗れたことではなく、挑戦しなかったということだろう。転んで、いくつ足のすねに傷を負ったのか、それこそが青年期の勲章となるのだ。」

次のようなことばは、本学における音楽と教育との結びつきを端的に示している。

私には、どうしても挑戦してみたいことがあった。

それは、私自身が長く音楽に携わり、学んだことを、今の若い世代である生徒たちに伝え、共有出来ないか、という思いだ。

これが、この学校を創った目的と言ってもいいだろう。私が音楽から教えてもらった最も素敵なことは、「音楽は、自分自身を表現する手段であるから、最初は技術の習得から入るが、そこから深い内面の表現に至らなければならなくなる。つまり、表現者は必ずその過程で、自分の人格を磨いていく必要性に迫られる」ということだった。

いくら美しいメロディーと、優しい言葉が綴られた歌詞を渡されても、自分の心の中に思いやりの無い人が、歌で優しさを伝えることは難しい。やはり、自分の中に無いものは、表現のしようがないのである。音楽は怖いくらいにその人の人間性を映し出してしまふ。私もステージに立つたびに、嫌というほど思い知らされてきた。千人の観客に歌を伝えようとすれば、それは私自身の心の中に、千人の人を包み込むだけのキャパシティーが必要なのだ。

つまり私は「音楽」があったから、《より人間的に成長しなければ》と、努めるようになったのだ。こんな歌が作れるようになりたい、歌えるようになりたいという目標があったからこそ、自分を磨き、より良い生活を心がけるようになったのだ。

私は彼らにわかったふうを装って道徳を説くことなど出来ないが、こと「音楽」というフィールドにさえ立ってくれば、《彼らのすべての疑問に答えてやる事が出来る》——そう思ったのだ。

いつしか「音楽」を使って「人」を育てる。そんな学校を創りたいと思うようになった。

多くの生徒を見ていて思う。誰にどんな才能と、

可能性があり、いつ開花するのかなんて誰にも分からない。「自分はプロになれるのでしょうか、自信がないんです」なんて聞いてくる生徒もいるが、自信とは人に褒められたからといって得られるものではない。そうであってはいけない。だったらそんな人は、低い評価に出会えば自信を失ってしまうことになる。

はっきり言って、人の評価ほどあてにならないものはない。そこで一喜一憂するのはばかばかしい、というより不幸なことだ。そうではなく、誰もが《自分の中には世界にひとつしかないオリジナリティーがあり、無限の可能性があるんだ》と信じて、ひたすら日々の課題に挑戦し続けるしかない。

「自信」とは「自分を信じる」と読むべきではないだろうか。

音楽を介した教師—生徒関係

前述したように、これまでの先行研究においては、サポート校の教師と生徒の関係は、「ひとりひとりへの対応」が重視されており、教師達は「教師らしくないふるまい」を「意識して努めている」場合もある。むしろ教師としてではなく「対等な立場で接し」、「生徒の一員、あるいは生徒のリーダーになるよう努力している」教師もいるというものだった。

本学院の場合も、こうした関係と重なっているように見えるが、「生徒も、音楽を愛するひとりの表現者」と見るという点で、より音楽による人間形成というものを強く感じさせる実践となっている。

本校に上下関係は無い。講師と生徒は同じ目の高さ、音楽を愛する同じ表現者として、対等に接している。もちろん、技術的には生徒より講師のほうが、より優れた演奏をするだろう。しかし、技術的に至っていなくても、生徒がより“魅力的”な演奏をすることは可能なのである。「音楽」の魅力は技術だけではない。生徒たちが彼らの年齢でしか表せないエネルギーで演奏されたとき、私たちはきっとひとたまりもなく吹き飛ばされる。

だから、本校における講師と生徒との関係は縦ではなく横、つまり先輩、後輩の関係であると考えている。講師たちは、たまたま20数年前に「音楽」に出会い、その道をまっすぐに歩んできた先輩なのだ。

ましてや「音楽」は、分かってらっしゃる人が、至っていない人に対して「教える」ものなんかじゃないと、私は思っている。(技術的なことはもちろん別であるが)

「音楽」はもともと生徒の中にあるもので、我々はそれに刺激を与え、増幅させ、引っ張り出すお手伝いをしているだけなんだと思う。

しかし、教師と生徒の関係は一般的なサポート校では「制度化された教育」に見られないほど対等であるにしても、本学院の特筆すべき点は、学校教育に本来は備わっていた尊敬の念が根底に横たわっていることである。そしてその理由は、本学院がトップクラスの講師陣であることによる。

きっとこれが普通の学校であれば、そうはいかないのではないだろうか。

ひとりの教師が、それぞれ価値観の違う40名の生徒から尊敬されることは、どんなスーパーマンであれ不可能に近い。しかし、ここには「音楽」という絞られたテーマがある。いくらつばろうが、講師と生徒との技術的な力の差は歴然としているのだ。

彼らが最も大切にしている「音楽」で、講師は言葉ではなく、プレーで生徒を圧倒することが出来る。その瞬間、講師は生徒たちにとって尊敬の対象となり得るのだ。

いくら私が「理想」の学校を創ろうとやっきになっても、生徒と最も近い距離にいる講師が、私の考えを理解し、具現化して頂ける人でなければ、「理想」は実現することはない。

そこで、私はまず講師は現役のミュージシャンにこだわった。それは、「教える」という作業もさることながら、「感応させる」ことが重要と考えたからである。

次に、高い技術を持っていることは勿論のこと、信頼できる人間性と経験、そして「音楽」に対する情熱と、しっかりとした考え方を併せ持った方であればならなかった。

この贅沢な希望をかなえることが出来たのは、西松ディレクターの力によるところが大きかった。「西松から頼まれたら、いやとは言えんしねえ」と、九州ではトップクラスのミュージシャンが揃った。

最近、本校を知る福岡の音楽関係者から、「よくこれだけの講師の方々が集まりましたね」と、言われる。現在、19名いる本校の講師こそ、私の「理想」の具現者たちなのである。

C&S音楽学院の実践 — 「自信」と「つながり」 —

(1) 開校と実際

もっとも、夢の実現にあたっては様々な困難や思いがけない出来事が続いた。開校当時については、次のように記されている。

毎日ロックやポップスを本格的に学べる、そんな学校が創りたい、それも専門学校のように高校を卒

業してからではなく、もっと早い時期、そう、義務教育である中学校を卒業して、すぐに学び始められる学校がいい。

だったら同時に高校卒業資格が取れるといいな・・・と、そんな虫のいい、音楽好き、若しくはプロのミュージシャンを目指す生徒には夢のような「音楽学校」を創ったつもりでいた。だから、「学校」というよりは「音楽のトレーニングジム」を創ったイメージしか持っていなかった。大きな夢を抱き、競うように練習に励んでくれる生徒ばかりが集まり、賑わっている、そんな学校の光景を想像していた。

ところが、実際に蓋を開けてみると、「音楽を真剣にやりたくて来た」という生徒にまじって、「普通の高校に行けなかった」生徒が、3割くらいの割合で入学して来たのだ。「小学校5年生の頃から学校に行っていません」とか、「いや、うちは幼稚園からずっと・・・ですから、学校と名のつくところには通ったことはありません」とか、願書の「短所」という欄に「ひきこもり」と書いてきた生徒までいた。

保護者の方々は、「音楽は好きなので、ここだったらなんとか通ってくれるのではないかと、するような思いで、本校の門を叩いていたのだ。

人生の一時期に、学校に行けないという理由だけで、母親が包丁を持ち出し、「子どもを殺して私も死ぬ」と言うほど、追い詰められた家庭があることも初めて知った。

そして生徒たちは、家庭や以前の学校での問題、悩み、そしてこれまでの経験のすべてをここに持ち込んできたのだ。

私は本当の「学校」を創ってしまったことに後で気がつき、あわてて「教育者」としての勉強を始めた…というのが正直なところなのである。

黙っていても「音楽」だけは必死でやる生徒の集まりを想像していた我々は、彼らの旺盛な欲求に答えられるカリキュラムを、と準備していたのだが、遊ぶことに夢中になっている彼らを、そこに向かわせるまでの、言わば一歩手前の授業内容にと変更せざるを得なかったのである。

まずは、「いかに音楽をやるのが楽しいことなのか」を、体感してもらうために、講師の方々と相談を重ね、その結果、理論を後にまわすことにした。実践から入り、身体で音楽を楽しんでもらうことを、まずは優先したのだ。その後、彼らが必要と感じる頃に、理論を差し込んでいこうということになった。

ところが結果的にこの試みが功を奏することになる。

いくら理論を詰め込んでも、いっこうに曲が書け

なかった生徒たちが、自由に、生き生きと自分の言葉で曲を書き始めたのだ。

「知識がある」と、「味わう」ことが違うように、料理の名前を知っていることと、料理を味わうことは違う。そして何より「料理」は食べるためにあるのだ。

オリジナリティー溢れる「C & S 音楽学院」の授業のやり方の芽生えだった。

しかし、こうした努力や工夫もすぐに実を結んだわけではない。何よりも、基本的なルールづくりは欠かせないものであったし、学院実践の成功の根幹には、後述するような音楽による「自信」と「つながり」をもたらした、授業や文化祭等の行事におけるライブという本学院ならではの体験的活動があった。

(2) ルールづくり

ルールづくりは、規律指導に悩む今日の学校における最重要課題のひとつとなっている。サポート校においては、前述したようにふだんの授業では「生徒に合わせた柔軟なもの」となっており、一般的にはゆるやかなルールであるが、本学院におけるルールについては、次のようになっている。

化粧も、ピアスも、服装も自由である。こんなことに決め事を作って、彼らを枠にはめることに意味を見出せなかったし、彼らの人間性とは全く関係ないことだと思ふからだ。そして何よりも、そんなことより伝えなくてはいけないもっと大切なことが沢山あったからだ。

私がこの学校で決めたルールらしきものは

1、ここではみんな自由だ。ただ、隣に座っている人も自由にできる権利があるのだから、自分の振る舞いが、隣の人の自由を妨害することは許されない。つまり、人に迷惑をかけなければ、どんな髪形、服装であってもかまわない。たとえば、本校にはもちろん制服が無い。ところが、「前の学校のです」と、学生服やセーラー服を着てくる生徒がいる。彼らは制服が嫌なのではなく、強制されることが嫌なのだ。

当然、集団で同じ場所、同じ時間を共有するには、細やかなルールが必要である。しかし、それらは「自分たちの権利を守ってくれるもの、自分たちにもメリットがあるもの」と教えてあげれば、彼らも一緒になって工夫をはじめ、協力してくれるのだ。

1、暴力は絶対に許さない。もし「いじめ」があった時は、いじめられた側にたとえ非があろうと、私はいじめた側を罰する。それはどんな理由があろうと、集団で個人を攻撃する行為とは分けて考えるべ

きだからだ。

1、マナーは守ろう。生徒同士、生徒と講師、生徒とスタッフの間の人間としてのマナーだけは守ろう。

この三つだ。あと、日本の法律は守る。ということだったが、これは当然、私が決めたことではない。

そして、クラス担任による組織的指導という視点がここで出てくる。「開校以来いろんな事が起こりすぎたことから、《私と生徒の距離をしっかりとっておかないと、歯止めが利かなくなる》と考え、一学期の途中から担任を大野先生にお願いし、まかせてみることにした。生徒と、私との間にワンクッション置くことにしたのだ」。担任の最初の仕事は次のようなものだった。

○ 学校からは 20 時までには退出すること。

○ 学校周辺で騒がないこと。

○ 国の法律を犯した者は、停・退学であること。

以上を、あらためて生徒に伝えてもらうことだった。(中略)

繰り返すが、生徒たちはルールを押し付けられることを極端に嫌う。

ホームルームから戻ってきた彼に、「どうだった?」と聞くと、「まるで TV 番組のガチンコみたいでした」と、力無く笑って答えた。

彼が話したとき、A は、「俺たちはそういうルールが守れないから、この学校に来たんだ」と、意味不明な開き直りを見せたという。

これらの記録に見られるルールづくりに関する実践は貴重である。学院長との距離感を意識した生徒への対応や、「絶対に許されざる行動」への停学・退学等のルールを開校の混乱期の段階で改めて確認したことは、まさに今日強調されている「毅然とした指導」であり、その意義は少なくはない。こうした方向性は、暴力を放置・増長させしかねない今日益々明らかになりつつある「抱え込み指導」の問題点を踏まえたかのような対応である。そして、それらのルールは、「自分たちの権利を守ってくれるもの、自分たちにもメリットがあるもの」と指導してゆくことによって基本的に守られていったのである。

(3) 音楽による「自信」と「つながり」

これまでの挫折を乗り越える自分探しの旅の中で、自分の道を見出してゆく本学院の実践の根底にあるものは何だろうか。それは第一期生の答辞に見られるような、音楽による「自信」と「つながり」であった。

①答辞 — 「自信」と「つながり」

今日、「C & S 音楽学院」の、一期生が卒業していく。

ヴォーカル学科の佐田麻美が、卒業生を代表して「答辞」を読んでいる。泣くまい、泣くまいと涙をこらえながら、感謝の気持ちを一生懸命言葉にしている。

「私たちはこの3年間で、音楽を通してたくさんのお話を学びました。人間関係に必要なもの、友達の大切さ、人とのつながりの大切さ。このC & S 音楽学院は生徒一人ひとりの良さを見つけて、そこを大事に引き出してくれます。それが私たちの自信につながり、今まで嫌なことから逃げていた自分が、まるで嘘のように頑張ってくるのが出来ました。

ここは、みんなにとって、ありのままの自分でいられる大切な空間でした。

そんな素敵な学校に通わせてくれたお父さんや、応援してくれた家族に本当に感謝しています、本当に私たちは幸せ者だと思います・・・」

まさか、彼女の口からこんな言葉が聞けるようになるなんて、3年前、誰が想像出来たろう。熱心に入学を勧める母親に「じゃあ1年だけ行ってやる」と、彼女は入学して来た。

人間関係は?・・・「かったるい」

友達は?・・・「ひとりで生きていくから必要ない」

人とのつながりは?・・・「うざったい!」

入学して来た頃、君はそう言っていた。

そういえば、今日卒業していく一期生の22名、みんなあたりまえのようにして、そこに座っているけど、この日を迎えるまで、ドラム学科の大庭と喜田以外は、みんな大変な道のりだった。

《こんな学校を創ったことは間違いだったんじゃないか》とさえ、思ったこともあった。でも、感動を与えてくれたのも、他ならぬ君たちだった。君たちがこの学校にやって来た時のことを、私はまるで昨日のこのように思い出せる。

②自分探し

本学院の実践の底には、挫折を含んだ自分探しの苦渋の過去がある。最後に、自分探しの代表的な事例を高校中退と不登校という二つに分けて、以下ではその中核となる部分をほぼ資料のまま取りあげたい。

a、高校中退

〔佐田麻美の場合〕

今日も耳をつんざくような元気一杯の佐田の声が、学校中に響き渡る。1階でエレベーターを待っているときでも、3階に居るはずの彼女の声が聞こえてくる。彼女の優しさ、明るさが「C & S 音楽

学院」を彩っている。

本校には、ライブ授業というものがある。日常的なトレーニングでは主に技術を学び、ここでライブ形式で表現を学ぶことを目的とした授業だ。

すべての生徒がステージに立つ。そして生徒たちに、その日特に心に残った出演者への感想をアンケート用紙に書いてもらい、本人へと渡す。当然良いパフォーマンスを見せた生徒にアンケートが集中することになる。佐田は誰にも気付かれないように、毎回一番アンケートが少なそうな生徒にそれを書く。《反応が少なかったと、辛い思いをさせたくない》という彼女の心遣いだ。

さりげなく、そんなことをやってのける生徒だ。生徒たちからの信頼も厚い。彼女に励まされて何人もの生徒がここで頑張り始めた。

まさか、彼女がこんなに変わるなんて・・・。

ヴォーカル学科、佐田麻美と最初に出会ったのは、4月の開校を間近に控えた「学校説明会」だった。うなずきながら熱心に私の話に関心する母親とは対照的に、彼女はぼんやりと窓の外を眺めていた。私の問いかけに頬杖をついたまま、「いまさら学校なんてかったるいし〜」と答えた。その投げやりな表情がひどく気にかかった。

中学校時代の佐田は、バレーボール部に所属し、明るく、元気一杯の女の子だった。母親はこのまま普通に高校、大学と進学してくれるだろうと、何の心配もしていなかったそうだ。

ところが中学を卒業し、進学した全日制高校のオリエンテーションで、「高校時代は勉強さえしていればいいんだ。良い大学、良い会社に入れば幸せになれる」との校長先生の話に疑問を抱き、佐田はひとり校長室を訪ねる。

「先ほどのお話は本当ですか、本当にそれで幸せになれるんですか」との彼女の質問に、校長は表情を変えずに、「そうだ」と答えたという。

失望した彼女は、《別に東大に入ったからといって、豊かな人間になれるわけじゃない、ここは辞める!》と決意した。まだ入学式前だった。

驚いた母親は、せめて学校に行ってみてから考えてみても遅くないからと説得するが、結局その学校を1カ月で退学してしまう。

あまりの突然の出来事に、「どこで育て方を間違ったのか」と、母親は真剣に悩んだそうだ。

「でも、今にして思えば、ご近所の手前とか、周りの目を一番気にしていたような気がします。あの子に申し訳なかったなって思っています」と、自省気味に話してくれた。

親の立場からすれば、わが子がみんなと同じよう

に出来なかったことに、不安を感じてしまうことは当然なことなのかもしれない。私も最初の子供が幼稚園に入ったとき、他の園児と一緒に行進したり、お遊戯をする姿を見て、それを「成長」と感じ、どこかで、ほっと胸をなでおろすような気になったことを思い出す。

でもそのことに、どれだけの価値があるというのだろうか。本来、一人ひとり別々の感受性を持ち、心地よいこと、美しいと思うこと、楽しいと感じることはそれぞれ違うのに、みんなと同じことを一緒にやり、みんなと同じものを感じているとしたら、そちらのほうが気味が悪い。

きっと、『みんなと同じようにしてしてくれるほうが安心』なのであろう。

そう、それはまさに親側の感情であって、子供には関係のないことなのだ。どこかで“大人の都合”を子供に押し付けていなかったか。

子供は、大人を安心させるために存在しているのではないはずなのに。

佐田は高校を辞め、1年をぶらぶらと過ごしてしまう。しかし、高校の卒業資格は取っておこうと、翌年の4月に通信制高校に入学。しかし、殆ど単位が取れないまま、また1年が過ぎてしまうのだ。

そうしているうちに、明るいだけがとりえの（私ではない、母親の言葉である）彼女が、だんだん家で話をしなくなり、自分の部屋に閉じこもるようになっていった。

心配した母親が、本校の存在を知り、無理やり彼女を引っ張るようにして「学校説明会」に連れてきた。というのも、母親は自分でも歌を教え、養護施設や刑務所に出向き、ボランティアで歌っていたし、佐田も歌が好きだった。だから、この学校だったら無理なく通え、高校卒業資格を取得してくれるんじゃないかと思ったのだ。しぶる彼女を押し切るようにして、母親は半ば強引に彼女を本校に入学させた。

しかし、一学期は遅刻や欠席が多く、やっとヴォーカルの授業はうけているかと思えば、レッスン中も鏡を出して眺めており、歌よりも化粧のほうが気になる様子だった。

昼休みにロビーでくつろいでいる佐田に声をかけたことがある。彼女は私を見るでもなく、「だってーいいしー、帰ろっかなー」と、返してきた。

喉元まで突き上げてきた言葉を私はグッと飲み込み、「頑張ろうよ」と、月並みな言葉をかけるのがやっとだった。

そんな佐田が1学期の後半から「音楽」にのめり込んでいく。ヴォーカル講師の“サム先生”の気遣

に釣り込まれたのだろうか。

サム先生は75年にクラウンレコードからデビューし、その後活動の拠点を福岡に移した現役のR&Bシンガーであり、その実力は広く知られている。音楽に対する情熱は半端ではなく、エネルギッシュな授業は、時に生徒を圧倒する。音楽には厳しいが、生徒をとっても温かい目で見守ってくれ、生徒からの信頼も厚い講師のひとりである。

毎朝授業が始まるまで発声練習を欠かさなかった同じヴォーカル学科の溝尻の頑張りにも刺激を受けた。

青少年期に、同世代の仲間たちから受ける影響は想像以上に大きい。人間関係に傷つき、疲れた心は、結局人間の中で、芋の子を洗うようにして、再び強く鍛えていくしかない。

きっと自分に仲間が必要なように、誰かも自分を必要としてくれているのだ。

「これまで、つっぱってきた時期もあったけど、やっぱりひとりでは寂しいし……」ほつりと佐田がつぶやいた。「歌を頑張り始めたら、高校の勉強までが楽しくなった」と、2学期からは無遅刻、無欠席。家でも、学校でも、みるみる本来の明るさを取り戻していった。

母親はこう話してくれた。

「この学校に通うようになって、どんどん昔の彼女に戻っていきました。

学校から『ただいま～!』って大きな声で帰ってくるようになって、『今日ね、学校でね』って当日あったことを、もううるさいくらいに話すんですよ。彼女がだんだん素直になっていくのを横で見ながら、親のほうまでが、忘れかけていた素直さを取り戻していくようでした。

それから周りの人に対して思いやる気持ちが、育っていったように思えます。人間的に成長してくれたな、と喜んでます。今では全日制の高校を辞めたことが良かったんじゃないかと、家族で話しています。あのまま続けていたら、彼女の良いところがつぶれちゃったんじゃないかと。

こんなふうに話せる日が来るなんて、夢にも思っていませんでした」

「この学校に入って、歌が上手く歌えるようになったとか、楽器が弾けるようになったとか、作詞作曲が出来るようになったとか、そんなことじゃなくて、人間的に成長出来たと思えること、それが一番嬉しい」——そう言ってくれる佐田、その心の成長が彼女の歌を変えた。聴いた人の心に、いつまでも深く残るような、いい歌を歌うようになった。

こうして彼女は、私の「理想」を見事に体現して

くれた、かけがえのない生徒となったのである。

b、不登校

〔手寫葵の場合〕

彼女は福岡市のベッドタウンとして都市化が進んだ隣の春日市から本校3期生としてやって来た。中学生のときに学校でいじめがあり、それを注意したところ矛先が自分に向けられた。それが原因で不登校となる。

そして自分の部屋で、毎日大好きな映画のビデオを観たり、音楽を聴いて過ごす。中でもお気に入りにはディズニーとスタジオ・ジブリの映画だった。まさかその数年後に、ジブリ映画の主人公が自分の声でしゃべり、自分の歌がその画面から流れ出てくるなんて、映画に出てくる魔法使いでもそうそう考えつかないことを彼女はやってのけるのだ。

まだ、そんなことは誰も知らない頃の話。

手寫葵が本校を知るきっかけは、たまたま私の知り合いが同じマンションの下の階に住んでおり、学校に行かなくなったことを心配して、「こんな学校があるよ」と紹介してくれたのだ。

両親に連れられて彼女はやって来た。すらりとした長身で、ストレートの長い黒髪がよく似合う子だった。中学の頃の経験から学校の先生を信じられず、大人に対しても壁をつくっていた彼女は、『いったいどんなことを聞かれるのだろう』と身構えていたそう。

ところが話の中身は自分の好きな本や音楽のことばかり、最後までほとんどそれで終わってしまった。彼女にしてみれば、そんな話を親以外の大人が親身になって聞いてくれたことはなく、とても嬉しかったのだそう。《この生徒さんが楽しそうに歌っていたのはこういう先生がいるからだろうな。成績とか友達に話しが合わせられるかなとか、そんな小さなことを心配していたけれど、そんなことよりも音楽に向き合うことが一番で、歌いたいと思えば歌っていいんだ。それが幸せなんだ。ここに居ていいんだ。私はこれが好きだと主張していい場所なんだ》と直感的にそう感じ、入学を決めたという。

中学校の頃の経験から、人に対して心を閉ざしていた彼女だったが、レッスンをとおして少しずつ変わっていった。歌ったあとに、「いい声だね〜!」と体全部で褒めてくれる講師や、「良かったよ」と同級生に言ってもらえることが本当に嬉しかったのだそう。レッスンでできなかったことが練習してできるようになったとき、「ちょっと聴いてみて」と友達に頼んで歌を聴いてもらったり、「この曲、葵ちゃんに合うと思うんだよね」と同級生に楽曲を勧められたりと、「音楽」を媒介として友達とも楽

しく過ごせるようになった。

その変化は家庭でも現れていた。「先生にこう言われたとか言ってきたぞ」「先輩のライブを見に行ってくるとか言い始めたぞ」と、ご家族もびっくりしていたそう。

あるコンテストがきっかけとなって、彼女は高校2年生のときに大手レコード会社と契約する。そして卒業を待って、ずっと彼女が憧れていたスタジオ・ジブリの2006年の新作映画「ゲド戦記」の主題歌を歌い、ヒロインの声優までやってデビューするのだ。

テレビに出始めの頃の彼女を観た人は、おとなしいというより少し暗いかな、という印象を抱いたのではないだろうか。まだこの頃の彼女は中学時代のダメージを残していたように思う。しかし、レコーディングの際ディレクターが、「彼女のかげりが、この歌の世界をもう一歩深いものになっている」とつぶやいたのだ。

彼女にとって思い出したくもない辛い中学時代の経験、でもその経験があったからこそ今の歌がうたえるようになったということなのだろう。

人は、過去は変えられない。変えられるのは現在と未来だけだと言う。でも私は過去さえ変えられるのだと思った。それは「あの経験があるから今の自分がある」と言えるようになったとき、つらい過去の出来事も貴重な財産として輝き始めるのだ。

手寫葵の歌と同じように誰もが何か「ひとつ」を持っている。その「ひとつ」を自分のものにしたとき、これまでのマイナスをプラスに変えていくことができるのだ。

手寫葵が本校を卒業するときに聞いた。

「5年後には、どうなっていたい?」

彼女はこう答えた。

「5年後には自分の本当の声で歌えるようになっていたい」

もう数ヵ月後には映画が封切られ、その後CDがリリースされることも決まっていた。テレビや新聞で「奇跡の歌声」などと騒がれていた時期なのだ。

普通の女の子であれば、「5年後ですか、そうですね5年後には武道館でワンマンコンサートをやってみたいです」とか「ドームツアーですね」とか答えることだろう、ところが彼女は周りの喧騒にうかれることもなく、しっかりと自分自身の課題を見据え、ピクリとも目をそらそうとしていない。

やはり、この子は「本物」だと思った。そして手寫葵は2011年にもう一度スタジオ・ジブリの新作「コクリコ坂から」の主題歌を歌う。

ジブリが同じ歌手を二度使うことはこれまでになかった。

[Yの場合]

冷たい視線に耐え切れず、Yはその頃から死ぬことばかり考えて過ごした。

中学校になっても教室に入れず、学校に行ったときは母親と一緒に保健室で勉強した。

ところがある朝、数人の先生がやって来て、無理やり彼女を教室に連れて行こうとした。「でもそのとき、お母さんは私を助けてくれなかった」・・・少なくとも彼女はそう感じてしまったのだ。

以来、母と子の関係が壊れた。

話しを聞きながら、私もこれまでに何度も同じ過ちを犯そうとしたのではないかと思った。(中略)

Yもゆっくりと時間をかけながらその「時」に向かっていく。きっかけは中学2年のとき、突然テレビ画面から流れてきた。本校卒業生の手寫葵が歌うスタジオ・ジブリの新作映画「ゲド戦記」の主題歌が、劇場公開の予告CMとして流れたのだ。わずか15秒の歌声にYは釘付けになり、涙が止まらなかったという。

CDを捜し求め、毎日手寫葵の歌を聴いて過ごした。そんなあるとき、九州国立博物館で手寫葵のコンサートが開かれることを知り、彼女は出かけて行った。

「始めて葵ちゃんの歌声を、生、で聴いたとき、どう思った？」と私が聞くと、

「・・・生きようと思った」と、彼女は静かに答えた。

そしていつか手寫葵のように、誰かに希望や勇気を与えられるミュージシャンになりたいとYは本校に入学して来た。

本校ではギターや作詞・作曲を学び、自分の辛かったこと、苦しかったことを自作のメロディに乗せて歌った。コンテストにも積極的に参加するなど、少しずつではあるが生きる力を取り戻していくようだった。

学校で憧れの手寫葵とも会い、直接励ましてもらうことも出来た。

やがてここで「仲間」と呼べる人たちに出会えた。嬉しくて、その日は泣きながら家に帰ったそうだ。いつしか母親へのわだかまりも消え、親友のように仲良く笑えるようになった。

そしてこの春、Yにとっては「生まれて初めての卒業式」を迎え、彼女は関東の大学に進学していく。

Yの両親は桜の花が嫌いだった。それはこれまで何度も、多くの子どもたちが桜の花の下、晴れがましい表情で式典に参加する姿を横目で見て来たからだ。どうして自分の子どもだけが・・・と苦しんで来たからだ。

今年は寒さの影響で桜の開花が遅れたから、大学の入学式がある頃はきっと満開の桜が咲くことだろ

う。その桜を両親はどんな思いで眺めるのだろう。

彼女の長い冬が終わり、つぼみが芽吹いた気がする。

桜は桜、梅は梅。

大切なことは信じてやること、自分らしく咲く時が必ず来ることを。

卒業ライブでは、これまでご心配をかけ続けたお父さん、お母さんに感謝の気持ちを自作の歌に乗せて伝えていた。

はかま姿で歌う彼女を見ながら父も母も泣いていた。

「大丈夫だよ、ここから見守ってあげるから、思いっきりやっておいで」と、震える背中が、そう言っているように私には見えた。

[T・M・Kの場合]

ピアノを弾きながら素晴らしい歌を歌ってくれるまでになった。

とにかくTは、練習するときの集中力がすごい。同じフレーズを繰り返し、繰り返し長時間弾き続けることができる。

私に専門的なことはわからないが、この集中力は適応障害と診断されたそれと非常に近いところにある能力ではないかと思うのだ。つまり、それは「障害」などではなく、「音楽的才能」だったのではないかと。

ところが残念なことに、そうしたマイナス評価を受けると、Tは自信を失ってしまっていた。自分の感受性を否定し、普通の子らしく振舞わなければいけないと努めてきた。心が悲鳴をあげるまでに、そう時間はかからなかった。もし誰かが、「それは君の才能なんだ、個性なんだよ」と肯定してくれていたら、彼女はこんなに苦しまなくて良かったんじゃないかと思う。

彼女は一度、高校で失敗し、本校にたどり着いた。そして「音楽」で自信を取り戻していったのだ。「先生たちが、本気で褒めてくれているのがわかるから」と。そして音響の勉強をしたいと専門学校に進学していった。

ヴォーカルクラスのMはこう言った。「これまで、自分の、ある部分、を出したら、友達からいじめられた。だから、それは、いけないものだと思ってた。ところがこの学校に来て、音楽に乗せて、それを、を出したら褒められたんです。《あれっ?》で思ってた。周りを見たら、なんかみんなそうしてたんです。《いいんだ、ここではありのまま》で思ったんです」

またソングライティングクラスのKは、「自分にはコンプレックスがあったんですけど、この学校でコンプレックスは音楽的武器になるってことを学び

ました。コンプレックスを正直に音楽に乗せて表現したとき、自分にしかない説得力を持つてことを学んだんです」と話してくれた。

おわりに

過去の様々な壁を乗り越えようとする教育実践というのは、すべてがうまくいくわけではない。むしろ、うまくいかない事例も少なくはないというのが通例でもあろう。ここでも「すべての生徒がうまくいった訳ではない」として、学院長の「もう何もしてやれることがないのか」という言葉に、うつむきながら去っていったある生徒の事例も載せている。しかしこうした事例もそのまま取り上げているだけに、ともすればこれまでにありがちだった、熱血教師の感動ドラマや一時的な成功事例には見られない長年にわたる実践の重さがある。つまり本学院の実践は、通信制高校のサポート校という枠組みを超えた、生き方を根底においた音楽におけるキャリア教育の可能性をも感じさせる注目すべき事例となっているのである。

これからのさらに多様な中等教育の可能性を示唆する貴重な事例の紹介という本稿の目的により、資料引用が続いたが、最後のまとめも学院長の言葉で締めくくらせていただきたい。

さまざまな個性が自分らしく誇らしげに花を咲かせることが出来る、すべての学校がそうなればどんなに素敵なことだろう。

小さい頃から、その突出した感受性が原因で、ちょっと他と変わっているからと端っこに追いやられ、やがて不登校になった子がいる。自分の部屋に引きこもって外部との接触を絶ち、その独特の感受性を増幅していった子どもたち。その独特な感受性がここで音楽と結びついたとき、まるで化学反応をおこしたようなまぶしい輝きをみせる。その輝きは常人が努力によって表現しうるものではない。

「C & S 音楽学院」は、音楽的才能の宝の山なのだ³⁾。

³⁾ 本学院のその後の実践については、毛利直之『自分らしく歌うがいい—不登校なんかで壊れるな—』学びリンク、2013年、を参照。